リハビリテーション部臨床心理室

公認心理師　主任　和田 寿美

はじめに

リハビリテーション部臨床心理室は、常勤の公認心理師 2 名体制でした。

回復期リハビリテーション病院の入院に 1 名、その他に 1 名を配しました。入院については 4 フロア 8 ユニットの入院患者を対象としています。その他とは、外来と、高知県からの委託事業である高次脳機能障害支援拠点センター青い空の業務です。

コロナ感染防止対策として入院と外来業務を担当者で分けることになりましたが、結果、業務整理につながりました。但し、フォローし合うことができないので、諸事情で担当者が不在となった場合には介入を休止せざるを得ないので､そのまま実績にも影響することになります。

実績について

〇近森リハビリテーション病院）

図 1 では､月別の入院及び外来での新規患者数を示します｡新規介入した入院患者は 43 名（前年比 123%）、外来患者では 37 名（前年比 154%）でした。

図 2 では入院の新規患者の疾患内訳を、図 3 では外来での新規患者の疾患内訳を示します。例年と同様に、脳血管疾患が最も多く、次いで頭部外傷（脳外傷）となります。入院の 7 割弱を脳血管疾患の患者が占めています。外来では、脳血管疾患と頭部外傷（脳外傷）が約半数ずつというのが特徴的です。

介入の実人数について、図 4 で月別の推移を示します。月によって、新規および終了の人数も異なり、ばらつきがあります。入院では 1 ヶ月平均 8.6 人（前年比 108%）でした。外来では同じく 25.8 人（前年比 126%）でした。

図 5 では、入院・外来における介入ののべ人数を示します。入院で 1 年間に介入したのべ人数は 698 名（前年比 112%）、1 ヶ月平均は 58 名。平均すると 1 ヶ月間に患者ひとりあたり 6.7 回、計算上は週 1-2 回となります。外来ののべ人数は 768 名（前年比 108%）、1 ヶ月平均は 64 名。平均すると、患者ひとりあたり 2.5 回。 1 ～2 週に 1 回の定期的通院の方がほとんどを占めますが、一部評価目的の短期間外来の方がいました。

入院では、複数のユニットを掛け持つため、煩雑にならないように気を付けています。介入予定や情報交換の機会など調整が必要となりますが、他職種の協力をいただきながら、業務遂行できています｡指示内容や状態によって介入の頻度が異なります｡神経心理評価だけでなく、発症・受傷後の精神的不安定や障害認識獲得のための心理面接が増加傾向でした。コロナ感染による病棟閉鎖や個別介入が出来ない期間が生じ、十分に介入できないことがありました。面接や認知リハビリテーションなど関わり方の工夫は、今後の課題と考えます

外来は、直接介入が平日午前と水曜午後の枠で埋まるため、外部機関との連絡や担当者会などは午後の時間帯を活用します。病院以外の機関との連携は、その方だけでなく、次の機会にも活かせることがあるという点で、重要と感じています。介入については、神経心理評価と心理面接を主としています。自身が障害認識すること、生活への工夫などで適応力の向上を目指しています。短期間の介入となるのが、精神障害保健福祉手帳、障害年金（精神）の申請・更新のための評価、自動車運転再開のための評価です。できるだけ迅速に介入開始し、的確な結果分析、報告書作成、わかりやすいフィードバックなど心掛けているものの、さらなる知識や技術の向上を図り、お待たせすることが少ないように対応していきたいと思います。コロナ感染防止対策の必要から同伴する家族も限定され、そうすると家族への声掛けが減っていましたが、家族支援のあり方についても工夫していきたいことのひとつです。

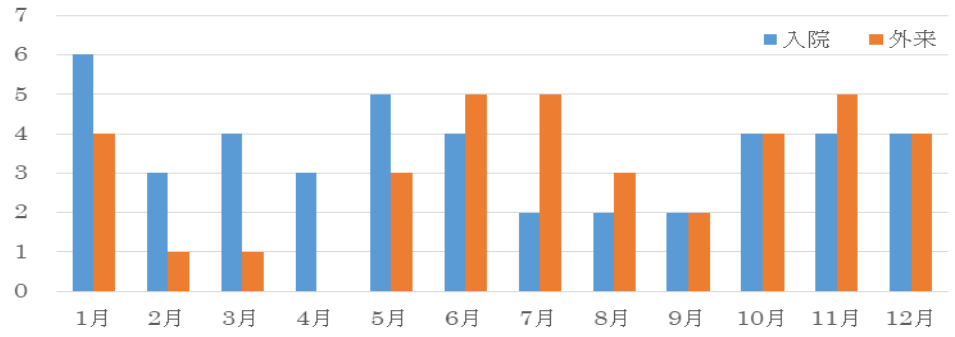

図１． 月別新規患者数

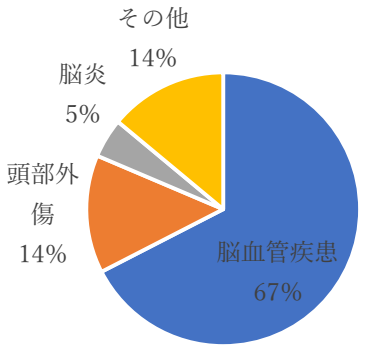

図２． 入院の新規患者の疾患内訳

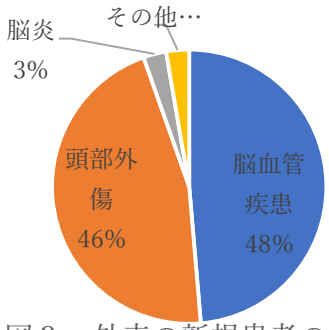

図３． 外来の新規患者の疾患内訳

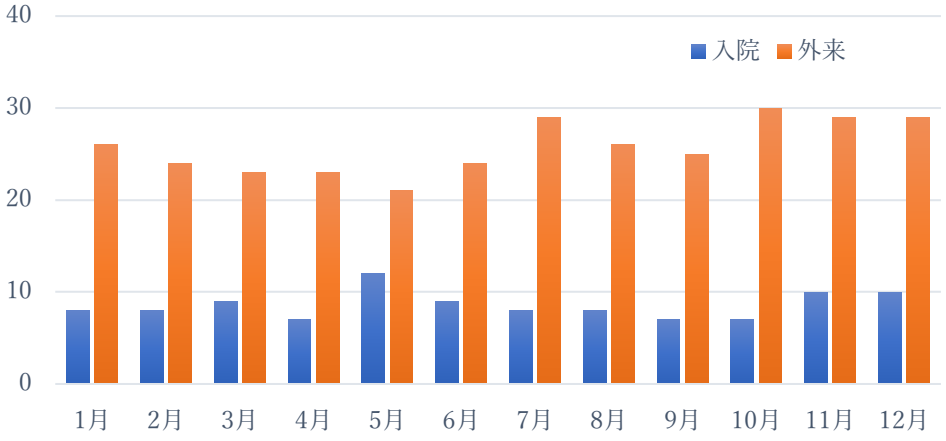

図4． 月別介入患者数（実人数）

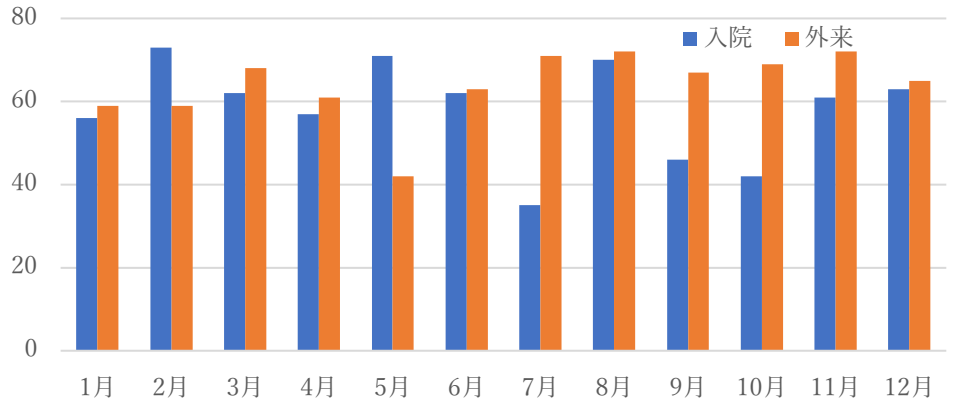

図5. 月別介入件数（延べ人数）

〇高知県高次脳機能障害支援拠点センター　青い空）

高知県内の高次脳機能障害に関する相談支援と普及啓発事業に取り組む機関です。スタッフは、NPO 法人脳損傷友の会高知青い空所属の支援コーディネーター3 名（兼務；理学療法士・作業療法士）と当院の公認心理師です。主に、支援コーディネーターが交代で午前に、午後は公認心理師が対応しています。

図 6 に、2022 年 4 月から 2023 年 3 月までの月別相談件数を示します。初回相談が 100 件、継続相談が 532 件の合計 632 件でした。当事者とのやり取りが 302 件、家族とのやり取りが 116 件、支援者とのやり取りが 214 件でした。

当事者とのやり取りの中には、個別の心理面談を含みます。発症・受傷から過ごしてきたことを承認し、当事者自身が障害や症状をどう理解し、周囲に理解してもらうためにどんな工夫ができるか、などについて話し合ったりします。家族からは、当事者の症状に対して、どう対応したらよいかとの相談は多いと感じます。特に、障害認識できない、易怒性などの社会的行動障害、精神症状などです。支えている家族自身が疲弊し、励ましが欲しいとの気持ちが聞かれたこともあります。当事者の安心、安全につながるので、家族自身が元気に過ごすことは重要で、そのために家族も支えられる場や人を持つことが必要だと伝えるようにしています。支援者からは、高次脳機能障害に適したサービスについての問合せや、当事者の症状理解と適切な対応についての相談などがありました。症状理解のために担当者会に参加する機会も増えつつあります。

高次脳機能障害と言っても、脳損傷の程度や部位による差はもちろん、発症・受傷までの生き方や環境などの個人差も大きく、一人一人違うということを実感しています。障害や症状を知っているからといって、相手が欲する回答を提供できるわけではないので、当事者に、家族に、あるいは支援者に寄り添いながら、共に考えていこうという姿勢を大事にしています。

また、ＮＰＯ法人脳損傷友の会高知青い空は、当事者・家族会を母体にしているので、互いの支え合いのための『ミーティング』の場を毎月持っていますので、そちらへの参画も大事にしています。コロナ感染が拡大した際には開催中止となりましたが、女子会、中土佐町のミーティングではオンラインも活用しました。県外在住者が参加できるというのは、思わぬ産物でした。

啓発活動として研修会等を開催しています。地域研修会の参加者数が年々増えているのは、支援拠点センターの認知度の向上を示していると考えます。家族教室はオンライン実施でしたが、少人数参加の為、個別の情報も話し合いやすかったという側面がありました。次年度は対面で行う計画をしています。

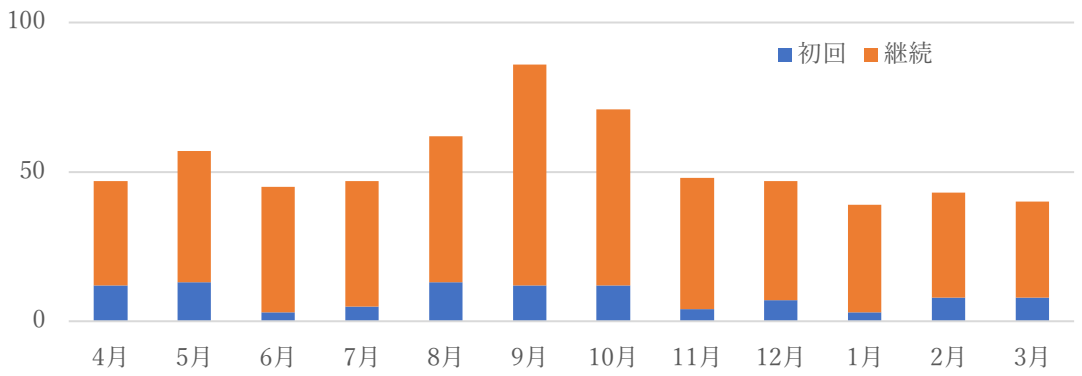

図6. 2022年度相談件数

まとめ

公認心理師は、心理的支援を必要とする方に介入し、その周囲の家族、支援者らへの援助や助言を行うという役割を持っています。目の前の患者（当事者）をひととして全体として理解するために、心身機能を捉えながら、今に寄り添います。関わるまでの生き方を肯定し、その人らしさやこれからの生き方を模索することを支えていきます。患者（当事者）の環境となる家族や支援者、地域社会が安定していると、患者（当事者）が自身の適応（回復、進化）に取り組みやすくなると考えます。職種として立場としてできることは限られていると自覚し、だからこそ他職種の協力や、他機関との連携が必要かつ重要となります。患者（当事者）、家族を中心としながら、支援者とともに、支え合う関係作りに努めていきます。